

# 徳山藩の改易と再興

— 奈古屋里人の生き方 —

会員 森重祐次

本稿のテキストは『徳山還付一件(徳山市立中央図書館叢書)』である。このような公としての記録は少なく、宗藩への遠慮もあつてか個の日記類が多い。

一〇〇ページに及ぶ内容からは、事件の発端から藩の改易、再興までの道筋が記され、奈古屋里人を中心とした徳山藩の人々の血のじむ苦難が読み取れる。徳山藩最大の危機であつた改易という処罰に対し、里人の士魂と忠義、さらに、巧みな情報収集と敬神崇祖の精神が、江戸幕府治世下では他に例を見ない再興という成果を勝ち得ることができたのである。この一連の経過を記録している『徳山還付一件』の一部をピックアップし、筆写で解説したい語句もあるため、読み易く文を添えた。

## 一、事件の発端

萩本藩と徳山藩境地の一本の松を巡つて

周防国徳山領長の萩外藩と萩本藩の  
 一、尾崎山之事  
 周防国徳山領長の萩外藩と萩本藩の  
 一、尾崎山之事  
 萩本藩と徳山藩境地の一本の松を巡つて

古文書例文①

周防国徳山領・長門萩領境、万若山尾崎山之事  
 周防都濃郡徳山領之内、万若山之うち尾崎山、往還より

五六丁北、民之葬場なり。此処之境目之道筋より八間半徳山領之内に之有松木、萩領西久米村百姓父子三人切取候所、山之守護、足輕伊沢里右衛門行懸り差留、立山之木に候間、難差免候。松並び鎌も差置罷り帰候様にと申候処に段々無体之儀申懸り口外悪口申候。

正徳五年（一七一五）万役山で起こった一本の松の木をめぐる境目論争は、ついに百姓切り捨てという事態となり、宗支藩の対立にまで発展した。

萩藩主毛利吉元は長府藩からの世嗣ながら見識も高く、一方徳山藩主毛利元次も改革を進める名君であった。しかし徳山藩初代藩主毛利就隆の分地以来両藩は反目しがちで、富海と三田尻の境目においてもトラブルが多かった。

この件も両藩相譲らず、奈古屋里人は事態を憂い元次に諫言したが、却って追放処分となり、三田尻に居を移した。

年が明け正徳六年（一七一六）、吉元は、幕府に「元次



写真① 史跡・万役山尾崎（周南市桜木3丁目シルバー人材センター入口側）

は本家に対し「違乱あり」と訴えた。処分は予想外に厳しく「元次は新庄藩にお預け、嫡子百次郎は萩藩預け、徳山藩領は本藩に還付」となった。

この報に藩内は騒然とし、接收に応じるか、徹底抗戦かで紛糾した。

事態は、追放先から駆けつけた里人や当職の兄奈古屋玄蕃の説得もあり、ひとまず裁定に応じ後の再興運動にかけることになった。これにより徳山藩の領地は没収、館や藩士家屋敷も解体され、元次は出羽国（山形県）新庄

藩に預り、家老用人たちは流罪となった。

その後まもなく、藩再興を願ひ徳山藩の百姓、町人が大挙して萩に向かう途次、山口で本藩役人に制止されるという事件も起こつたが、それ以降、藩再興運動は有志の密かな動きに変わつていった。

二、若者の逸る気持ちをなだめ時期を待つことを説く  
功を急ぐより、武名を捨てても忠義に励むこと

古文書例文②

然共、年若く勇氣之進に申処也。尤も神妙之志早々返答に申遣候者志之趣一々尤に候得共、左様に仕候ては武士之一分計立、主君何れも御存生に候故、御家建立之事こそ第一之忠義と存候。只今死を一処に相極候ハハ、心苦敷を散じ世上に武の志も露運可申候得共、忠義に捨る身命、武名を世上に触候にも及はず、君の御為さへ能候ハハ、たとえ武名埋り捨り候へとも苦しかる間敷候。

里人はかつて周旋役をしていた京都へ移住した。かつて世話になつた青蓮院宮尊祐親王の館に出入りしながら、江戸・大坂・徳山等の情報収集に努めた。

享保元年（一七一六）將軍が八代徳川吉宗に代わり老中や御用人も交代、後にこれが再興の一助ともなる。さらに紀州藩の商人等とも交流があり、これも良い方向へとつながつた。

里人を援助する藩士や町人たちも各地へ散り、伝手を求めて活動した。

徳山では、配下の有志が先導して再興運動を仕掛けたが失敗、萩藩の役人に捕縛されるという事件が起こり、

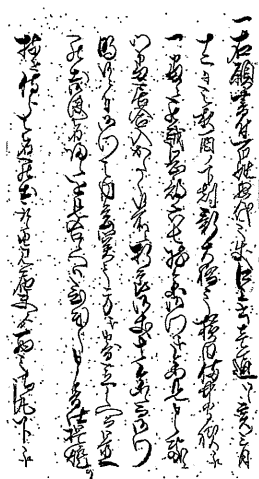
再興運動は次第に下火になっていき、世間で評判となることも少なくなつた。

この折、江戸にいた若い藩士から里人へ「早く決行したい」という手紙が届いた。②例文はそれに対する里人の返書である。「一時の功を焦るより、武名を埋め捨て候とも」という忠告であつた。

こうしたこともあり、遂に里人は神仏に祈願し「今は天の時に候」と、三通の「嘆願書」の執筆に取りかかつてのである。

### 三、天の時到来と「嘆願書」を幕府上層部へ届ける

ことを江戸在住の藩士に依頼、実行



古文書例文③

右願書付、百姓総代之文口上書一通宛、亥の三月十二日夜酉の下刻、新大橋之横田備中守様へ一番に罷り越し、岡部六七持参り、御門へ参り見申候処に門番居合せ、入かたく候処に、折節、御使者参候て御門明け候に付き、御門之内玄関の方へ寄立候へて置き罷出候。御使者帰り候を見合候へは、ひそひそ申音仕、提燈を持せ侍分の者、罷出取候由見届け、夫より西之御丸下へ——

享保四年（一七一九）里人が心血を注いで作成した嘆願書三通は、差出人はいずれも「周防徳山百姓中」で、宛名は「老中水野和泉守と大目付横田備中守、平目付」へとなつている。

この嘆願書を、江戸で活動中の戸田親子と岡部六七（何れも中小姓役）が預かり、水野和泉守他二名の邸宅に投げ込むことにした。

文書中に描かれているようになかなかスリリングな夜であり、特に和泉守宅では、厳重な警戒もあり苦勞したが、明け方までには成功したようである。

この嘆願書は幕府内でも話題となり、特に將軍徳川吉

宗は、差出人は百姓とあるが文面の筆力から実際は武士であろうと、その心根を察し、忠義にいたく感動したといわれる。

その後、幕府から萩宗藩への問い合わせがあり、新庄藩にも毛利元次の聞き取りを行わせるなど、嘆願書の内容の是非について調べがあった。また流罪となっていた家老たちへも問い聞きが行われた。その結果、事態は当時例を見ない、藩の再興へと動き始めたのである。

#### 四、里人苦心の嘆願書が將軍を動かし、内意として

再興が許され、萩藩主より伝達された。

御内意  
松平民部大輔  
思召 茲は毛利宗藩に御免被成度、領内之百姓老若男女、兼て憐み候心中之段風聞依之、飛驒事隠居被仰付、倅百次郎へ知行。民部大輔、可遣之、急度、其段申渡候様に仰出候。飛驒御免、民部大輔兩人口上為御聞度、思召候得度共不宣。本家大切に思召。御内意申渡候。其段。心得可之有候。

古文書例文④

#### 御内意

松平民部大輔

思召 被出、毛利飛驒御預り御免被成度、領内之百姓老若男女 家来の面々、兼て憐み候心中之段風聞依之、飛驒事隠居被仰付、倅百次郎へ知行。民部大輔、可遣之、急度、其段申渡候様に仰出候。飛驒御免、民部大輔兩人口上為御聞度、思召候得度共不宣。本家大切に思召。御内意申渡候。其段。心得可之有候。

里人は幕府の処置について、期待と不安の交錯した日々を京都で過ごしていた。

やがて享保四年（一七一九）五月二十一日、京都の里人に次のような報せが届いた。

老中水野和泉守より萩藩主吉元（松平民部大輔）に私宅への呼び出しがあり、萩藩邸は大騒ぎとなった。翌日吉元が参ったところ、和泉守より「飛驒守元次お預り御免、世倅百次郎へ家統仰附候」ことを吉元の発意で幕府に願ひ出では、との達しがあり、吉元はこれに同意したとのことであった。

こうして、御内意が右例文④のように示されたのである。里人は神仏の加護と感謝し、早速お礼参りを行った。この報せは早速徳山へも伝えられた。まもなく元次のもとへ藩士が迎えに赴き、新規に建設された江戸下屋敷への帰参となった。帰途、里人の功績を聞かされ、元次は一筆、「神妙のいたり、肝に銘し候」と記し、里人へ与えたということである。

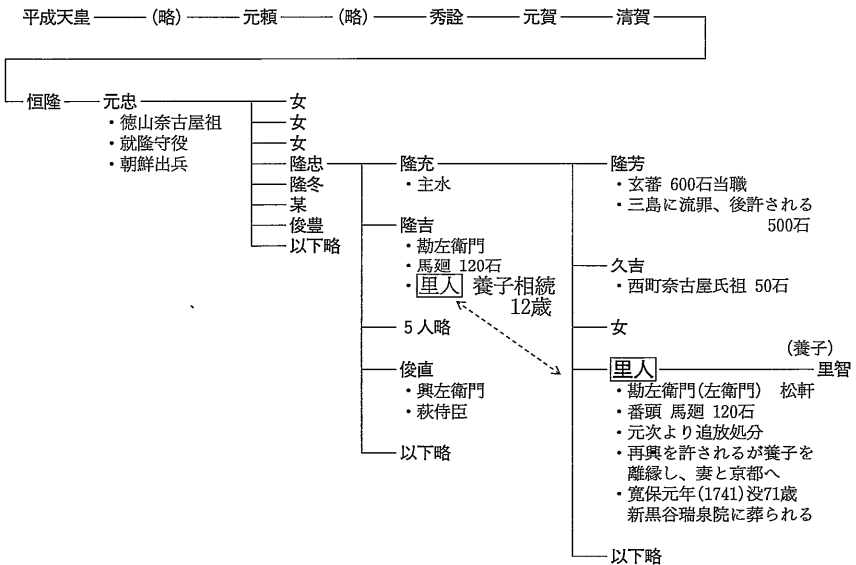
その年の秋、元次は波乱に富んだ四十七歳の生涯を閉じた。世子百次郎が四代藩主毛利元堯となり、徳山藩の再興に力を注いだのである。

注

・前半史料紹介（徳山藩の改易と再興）は、古文書会員が毎月一回集まり解説を進めているテキストの一部を例文として載せ、さらに解説を加えその概略を述べたものである。

・尚、後半は郷土史会の有志が昨秋京都へ奈古屋里人夫妻の墓参に訪れた折りの探訪記である。

### 奈古屋氏略系図



## 奈古屋左衛門里人碑への墓参

平成二十年十月二十三日、徳山地方郷土史研究会の会員が京都市左京区黒谷にある金戒光明寺の塔頭、瑞泉院を訪れた。ここに奈古屋里人夫妻の眠る墓がある。

金戒光明寺は幕末、会津藩主松平容保が京都守護職に任命されるにあたり本陣となつた場所で、芹沢鴨、近藤勇はここで容保に拜謁し、その後新選組が誕生したという謂れのある寺である。

長い石畳の両側には鳥羽伏見の戦いで戦死した会津藩士二百七十名余の墓が林立し、境内の正面には運慶作の文殊菩薩像が安置される三重塔がそびえている。その下手、岡の中腹の一角に一際高い頭彰碑があり、それを中心に左右に夫妻の五輪塔がある。

一同初めて参つた墓に手を合わせ、早速持参の道具で



写真② 奈古屋里人夫妻墓の清掃

清掃に取りかかった。見る間に顕彰碑の「奈古屋左衛門」の文字がくつきりと浮かび上がり、花筒に生けられた鮮やかな白百合や黄菊と、香煙のたなびく中、若い僧侶の読経が静かに流れた。

夫妻の墓とは別に、瑞泉院山門の傍らに「奈古屋里人先生菩提所」の碑が建っている。これは昭和十五年（一九四〇）に徳山の有志によるもので、金子正通の撰になる碑文に「一藩領没収当時先生追放の身に不拘、率先回復百方尽瘁、遂再興一先生毫不伐功、却辞禄断家飄然去郷心事高潔（一部略）」と記されている。

功なり遂げた里人のその後であるが、多くの誘いを退け家禄を離れ、妻と二人飄然と京都で隠遁生活を送ったという。徳山藩最大の危機であった改易という事態に対し、それを救った奈古屋里人の高潔な生き様は、今になっても教えられることは多い。

三百年の時を超えて、徳山地方郷土史研究会として里人の墓に香を手向けることができたのは、何事にも代え難い出来事であった。



写真③ 奈古屋里人夫妻の墓参り（京都 瑞泉院）